

#### 4. 摘出された頸動脈内膜病変と術前超音波所見との対比

(老年病学) 岩本俊彦, 馬原孝彦, 高崎 優  
(脳神経外科学) 西岡 宏, 原岡 襄  
(病院病理部) 芹澤博美

超音波検査が頸動脈病変の組織性状診断にどの程度役立つかを知る目的で、内膜剝離術によって摘出された頸動脈標本の組織学的所見と術前の超音波検査所見を比較した。対象の4例は内頸動脈狭窄例で、摘出標本の切片は短軸断面にて、超音波所見は短軸および長軸断面にて評価された。その結果、acoustic shadow を伴う高輝度部分には石灰化がみられ、一方、血管腔と同等の低輝度部分には脂質沈着、出血、比較的疎な線維成分が認められた。以上から、超音波検査は頸動脈病変の組織学的変化をある程度、診断することが可能であると考えられたが、低輝度部分の鑑別には更なる検討が必要であると思われた。

#### 5. 動脈硬化危険因子の minnesota-code 心電図心肥大および脈波速度亢進に及ぼす影響の検討

(内科学第二) 町島達人, 富山博史, 新井富夫, 広瀬健一,  
山科 章

【背景】心電図心肥大評価および脈波測定は独立した予後予測因子であるが、両者の関連は明確でない。

【目的】各動脈硬化危険因子が心電図心肥大変化および脈波亢進に及ぼす影響を検討した。

【方法】職域検診施行 3,342 例 (42±10 歳) を対象に、血糖、HbA1C、血清脂質、心電図、容量負荷法による脈波速度測定 (baPWV) を施行した。

【結果】97 例が高電位、33 例が ST 変化を伴う心肥大と診断された。多変量解析では心肥大に影響する因子は収縮期血圧 ( $R^2=0.08$ ) のみであった。BaPWV に影響する因子は、年齢、収縮期血圧、BMI、糖尿病歴、中性脂肪 ( $R^2=0.45$ ) であった。また、心肥大と baPWV の両者には独立した関連を認めなかった。

【結論】心電図心肥大評価は血圧重症度を反映する指標であるが、baPWV は動脈硬化危険因子の総合的な影響を反映する指標と考えられた。

#### 6. 閉塞性動脈硬化症における保存的治療の有効性と遠隔期予後

(外科学第二) 松本正隆, 市橋弘章, 榎村 進, 福島洋行,  
矢尾善英, 長江恒幸, 石丸 新

【目的】当施設において保存的治療を6ヵ月以上行った閉塞性動脈硬化症例について、その治療経過と遠隔期予後を中心に検討した。

【対象・方法】大腿・膝窩動脈を主病変とする Fontaine 分類 II 度以下の 61 例 (男 53 例, 平均 72 歳) 81 肢を対象とし、早期 (6~12ヵ月) および遠隔期 (18ヵ月以上) における症状、ABPI、NIRS の変化等について検討した。

【結果】1) 治療早期での 45 肢 (55.6%) に症状改善が得られ、悪化は 7 肢 (8.6%) であった。ABPI は改善および悪化を認めたものが各々 10 肢 (12.3%) および 11 肢 (13.6%)、NIRS-RT は、51 肢中改善 21 肢 (25.9%)、悪化 6 肢 (7.4%) であった。2) 遠隔期 56 肢では、症状改善が 33 肢 (58.9%)、悪化は 2 肢 (3.6%) であった。ABPI は改善 3 肢 (5.4%)、悪化 8 肢 (14.3%) であった。

【考察】大腿・膝窩動脈病変に対する保存的治療の効果や予後は良好であり、症状安定例や治療早期に症状改善傾向がみられた症例については、保存的治療を継続することが妥当であると考えられた。

#### 7. 腰部脊柱管狭窄症に対する、プロスタグランジン製剤の効果

(整形外科) 呉 茂明, 池上仁志, 遠藤健司, 西山 誠,  
田中 恵, 駒形正志, 今給黎篤弘  
(霞ヶ浦病院・整形外科) 伊藤公一, 市丸勝二

腰部脊柱管狭窄症の臨床症状は、腰痛、下肢痛、しびれ感および間歇性跛行など多岐にわたる。なかでも間歇性跛行の発症機序としては、動的要因としての機械的圧迫の増強に加えて、循環障害による馬尾や神経根における相対的低酸素状態の関与が注目されている。教室の駒形・間中の研究によると、姿勢の変化による椎骨静脈叢の循環障害が関与している可能性が強いことが報告されている。プロスタグランジン (PG) は、生体においては強力な血管拡張作用と血小板凝集抑制作用を有し、慢性動脈閉塞症や膠原病を中心に広く臨床応用されている。また、動物実験では PG は神経根血流の増加や酸素分圧の上昇に重要な役割を果たしていることも報告されている。今回、腰部脊柱管狭窄症患者に対し、保存的加療としてプロスタグランジン製剤を行い、その臨床症状の推移を観察したので、文献的考察を含め報告する。